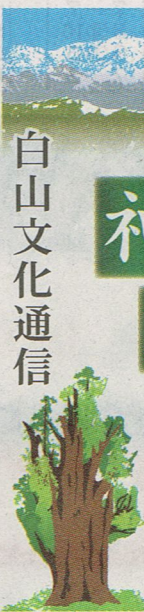


# いま、 神々 に学ぶ



白山文化通信

若宮 多門

## 平泉

今日、東北観光の目玉といえは、平泉中尊寺である。殊に昨年、世界文化遺産に登録されてからはなおさうである。ただし、私たちが中尊寺へ行ってきたと言いつ時の中尊寺とは、イコール金色堂のことである。

「五月雨の降のこしてや光堂」あまりにも有名な芭蕉の句。芭蕉は紀行おくのほそ道の中で、この句に添えて金色堂を説明している。「光堂は三代(藤原清衡・基衡・秀衡)の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散うせて、珠の扉風こやぶれ、金の柱霜雪に朽て既頽廃空虚の叢と成べきを、四面新に囲て、葺を覆て風雨を凌。暫時千歳の記念とはなれり」

この芭蕉の想いは、三百年の時を経て世界の文化遺産となり、まさに千歳の記念となった。  
この金色堂を中尊寺を見守ってきた神がいる。白山神である。中尊寺境内の最奥部に一山の守護神

として白山神社が鎮座する。能楽舞台を有する社といえは、お気付きの方もあろうか。

中尊寺において白山神社は特別な意味を持つといわれる。単なる鎮守社に留まらず、四月初午日に行われる祭礼は中尊寺最大の行事であり、その中心は一山の僧の嫡子で七歳になる童子を馬に乗せて白山御神前へ進む「御一馬」行事であった。これは中尊寺の僧になるには、白山の神がその子に依り憑くことが必要であったことを意味している。中尊寺では白山神が認めなければ僧侶になれなかったのである。なぜこれほど白山神は重要な神だったのであろうか？

中尊寺は天台宗寺院である。天台宗の総本山である比叡山延暦寺においても白山神は特別な神であった。すでに客神権現として日吉大社に祀られているのはよく知られたことではあるが、「延暦寺護国縁起」によれば延暦元(七八二)年に比叡山八王子の麓に、白山妙理権現が飛来すとの伝えがあり、また「日吉社神道秘密記」にも比叡山に白山神の降臨所があったと伝える。天台宗祖最澄は比叡山を仏教の根本道場とする理想のも

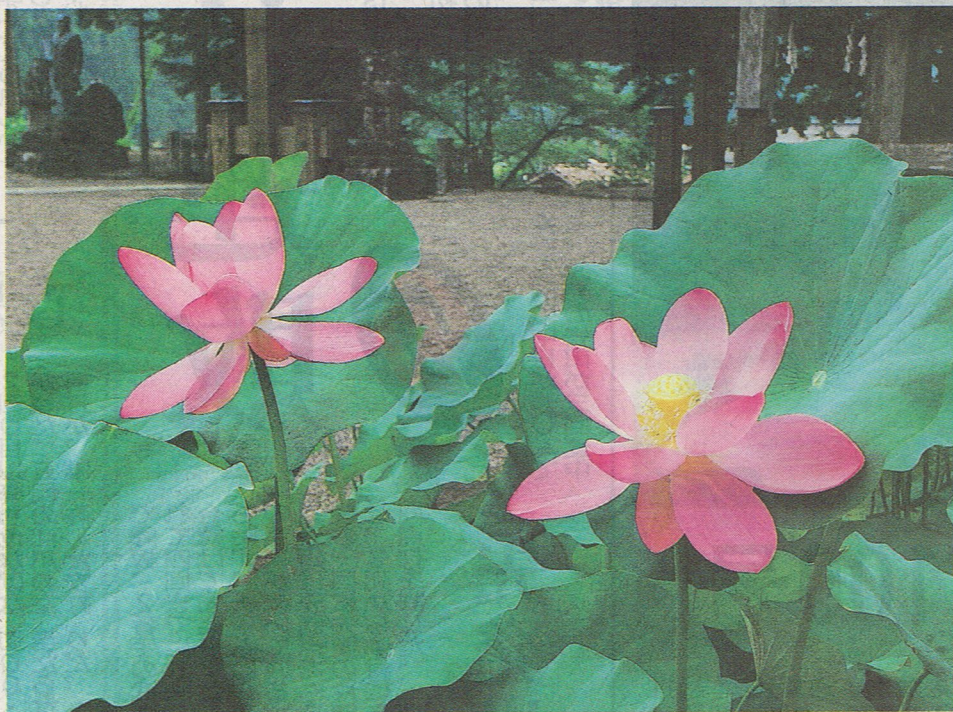
と、その理念や作法をすでに修験の霊山として高名であった白山より導入し廻峰行者の守護神として白山神を迎えたのではないかと思われる。

中尊寺寺伝によれば、その前身である弘台寿院の開基は嘉祥三(八五〇)年天台宗第二代座主慈覚大師円仁であり、北方の鎮守に白山神、南方の崇敬に日吉の神を携え祀ったとされる。山形の立石寺をはじめ東北各地には同様の開基を伝える寺院・神社が多数存在する。文化伝播のドーナツ現象か、

紹介したいと思う。

さて、毎年七月中旬になると長瀧白山神社の境内に中尊寺ハスが鮮やかなピンク色の花を咲かせる。昭和三十七(一九六二)年に行われた金色堂の解体修理の時、義経を自刃に追い込んだ四代泰衡の首おけから発見されたハスの種子を開花させたものである。中尊寺よりその守護神白山の膝元への、八百年の時空を超えた実在口マンあふれる贈り物である。

(長瀧白山神社宮司)  
〈毎月一回掲載します〉



長瀧白山神社に咲く中尊寺ハス。毎年7月中旬から下旬に開花する一郡上市白鳥町長瀧